りょうかわ

学校だより　令和元年5月27日号　新潟市立両川小学校

「ゲーム障害」‥他人事（ひとごと）であることを願って

校長　　中村　雅芳

昨日，新潟日報の紙面に次の記事が掲載されました。

「ゲーム障害」を新依存症にＷＨＯ，疾病分類を承認　　新潟日報　2019.5.26 Sun.
【ジュネーブ共同】世界保健機関（ＷＨＯ）総会は２５日，オンラインゲームやテレビゲームのやり過ぎで日常生活が困難になる「ゲーム障害」を新たな依存症として認定した「国際疾病分類」最新版を承認した。アルコールやギャンブルなどの依存症と並んで治療が必要な疾病となる。新疾病分類は２０２２年１月から施行され，世界中の医療関係者が診断や調査で使用する。

テレビやインターネットニュースでも広く報道されていたので，保護者の皆様もご存じかと思います。ゲーム愛好家や業界団体からは反発の声が上がったようですが，私はこれまで，同様の事例を身近で見聞きしてきたことから，妥当な判断だと感じました。

西日本新聞（５月２１日配信のネット記事）に，国立病院機構久里浜医療センター（神奈川県横須賀市）の樋口進院長のインタビューが掲載されていました。樋口院長は，日常生活を壊すゲーム依存が脳にもたらす影響や予防策について，最前線で治療と研究に取り組んでおられる医師です。記事の中での気になる発言を以下に羅列します。

「中高生の場合，昼夜が逆転し学校に行けなくなる。成人では高額をゲームにつぎ込む人が多い。さらに進むと，学校や仕事をやめるなどして将来に大きな影響を及ぼす。単なる『ゲームのやり過ぎ』で済まされる話ではない」

「日常生活の中心がゲームになり，現実世界がしぼんでいく。ゲーム仲間と競争や協力をするうちに，自分の役割ができ，ゲームの中での人間関係が強くなる。現実の生活に戻ろうとしても，勉強に付いていけず，友達もいないなど，ハードルが高すぎて簡単ではない。さらにゲームに逃げ込むしかなくなる」

「脳画像などを分析した海外の研究で，依存症の人は理性をつかさどる前頭前野の機能が

低下していることが分かった。アルコールやギャンブル依存症の人の脳でも同様の傾向が見られる。また，快さを感じる神経伝達物質ドーパミンを受け取る受容体（タンパク質の一種）が減少していることも分かっている」

「『ｅスポーツの選手を目指している』と話す患者が親に連れられ受診している。生活はまさに依存そのもの。『プロになるため』という言い訳で依存状態を正当化し，回復を妨げている。ｅスポーツがゲーム依存を助長している側面があることは否めない」

「アルコールやギャンブルと違い，ゲームは幼児でも始められてしまう。しかしゲームに触れるのが幼ければ幼いほど危険性が高く，数カ月で依存状態に陥る小学生も少なくない。治療も困難を極める」

「スマホやゲームを与えるのは，遅ければ遅いほどいいと考えている。子どもだけでなく，親や教師への啓発や教育が必要だ」

樋口院長の意見であり，すべてに当てはまるとは言えないかもしれません。しかしながら，子育て真っ最中の保護者の皆様には，このことに関心をもっていただきたくて転載しました。

子どもたちの家庭生活のルールは，親子で話し合い，取り決めるしかありません。したがってこれらの問題は，家庭に委ねられています。我が家には関係ないこと，他人事だと，一笑に付されることを願うばかりですが，もしも困ったことがあれば，学校までご一報ください。いつでもご相談に乗ります。

運動会まであと１週間

「元気と笑顔　令和に残る初勝利」というスローガンの下，子どもたちは精一杯，運動会に向けて取り組んでいます。両川小学校にとっても，子どもたち一人一人にとっても，心に残る素晴らしい運動会になることを確信してます。保護者の皆様，子どもたちの熱中症を予防する意味で，毎日，水筒を持たせていただきありがとうございます。この１週間も高温になる日が多く予想されますので，引き続き水筒の準備をお願いいたします。加えて，タオルや着替えなども必要になります。ご面倒をおかけしますが，ご協力をお願いいたします。

先週末には，新潟市教育委員会より「光化学スモッグに関する対応」について注意喚起を促す文書が各学校に届きました。運動会当日，光化学スモッグ注意報が発令された折には，子どもたちの健康・安全を最優先に対応いたします。そのため，予定していた進行が早まったり，プログラムを一部変更したりする場合もあります。あらかじめご理解，ご了承いただきますようお願い申し上げます。